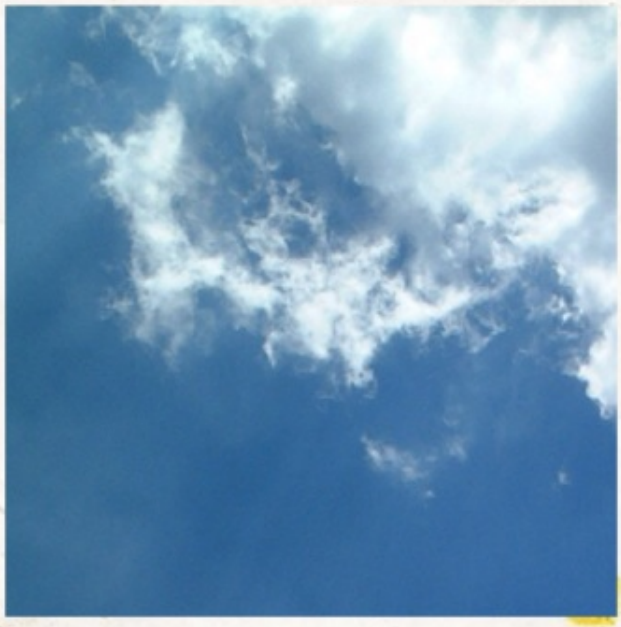
世界に色を、

メリ



頭脳明晰、容姿端麗、ついでに親が世界的なグループ会社の社長、とくれば気付いた時にはもうすでに人生の勝利はほぼ決まっていた。

そしてそれは歳を重ねるごとに成績･スポーツ･美的センス･はたまた年齢問わずの女からの人気に至るまで敵う奴がそうそういないということに気付くにつれて、ますます確定事項めいてきた。

そうなると子供はどうなるか。明らかに周りを見下した態度をとり、子供世界を恐怖政治で動かして蛇蝎の如く嫌われるがそのオプションのお陰で結果うまくやっていく、という子供もいるだろう。そうしたって人生の勝利は動かない。だがそれは２流のやることだ。

本当に頭の良い子供なら笑顔を絶やさず人当たりも良く、そのくせ周りの人間を裏で本人達も気付かないようにコントロールして、いつの間にやら自分が一番良い場所に納まっている、ということを平気でやる。

自分が周りに好かれて当然だと思っている一方で、疑うことなく自分を崇拝する普通の人達を見下し、嘲笑っている。

それが浅黄京介という人間だった。

何を持ってたとしたって成長してみたらチビかデブってんじゃ全部笑い草になりかねないけどね。

と解っている京介の懸念事項は幼少時から自分の成長具合くらいだったが、現在中学３年、身長177cm体重62kg、スタイルでも周りから群を抜きますます人生に怖いものなしという状態だった。

そんな順風満帆な環境での京介の不満は、
人生は退屈過ぎる。
この一点に尽きた。

周りは全てイエスマンでまともに会話できる相手なんかいないし、そもそも本気で話せば理解できる相手などいなかった。語彙の量もレベルも明らかに違った。

ちなみに京介人生初のカルチャーショックは学園の幼等部入学時で、周りの子供達のあまりの子供っぽさにひどく驚き、周りに合わせる事に慣れていなかった当時の京介は幼児に話を通じさせる事にひどく難儀した。

今思えば子供が子供っぽいのは当然で、京介が異質だったのだ。

その後は周りのレベルに合わせた会話術をマスターした。が、まだ不慣れな小さな時にはつい難

しい言葉を使ってしまったり、授業中などに教師も知らないような所から引用してしまったりした。そうなった時の周りの目などは堪らなかった。

凡人は幼少時から誰に教えられる事無くその中に紛れ込む非凡を排除することを知っている。少しでも奇異な所を見つければ出る杭だと寄ってたかって打つ。

感情の乏しい京介だったが、その時は本物の恐怖を感じた。

周りに適当に合わせる事を覚えてからは、普段の会話や授業中の発言･作文などで「あぁこの子達はこんな言葉を使えるようになったのか、成長したなぁ」と気付いて何となく感慨深い気持ちになるようになったりした。つまりは周りと自分が同じ人間だと定義することを諦めたのだ。

そう思ってしまってからはとにかく人生つまらなかった。自分の感情さえ計算して、どんな表情だって考えたものと寸分違わず作り、表に出すことが出来た。それと周りの反応や行動を先読みするだけで、これからの展開が容易に予想できた。

それはちょうど読んだことのある大して面白くもない本を無理矢理何回も読まされることに似ている。

これからの展開は十分知っていて期待も何もない、なのにダラダラ続いていくネバーエンディングストーリー。

それを壊そうとグレるほど愚かでない京介には、ひとつしか人生を楽しむ道がなかった。

それは恋愛。

普段は行動も反応もわかりやすい人間が、恋愛感情が絡むだけで思ってもみなかった行動を取ったりする。人生という決まりきった灰色のストーリーに多少の不確定要素が彩りを与える。

それが面白くて、京介はごくごく小さな時から彼女を絶やしたことがない。だが時々想像しなかったことが起こるとはいえ、京介にはやっぱりデートまで持ち込むのも、キスするのも、少し年齢が上がればSEXだって簡単だった。簡単じゃつまらないので、もう少し不確定要素を上げるために浮気を繰り返した。

不確定要素同士が合わされば、ますます面白いことになる。昔から恋愛に浮気が絡めば、平和な２国間にトロイ戦争を巻き起こし、権力を誇ったシーザーを殺させ、賢帝と謳われた玄宋を楊貴妃の魅力と共に腑抜けにしてきたような力がある。盤石なものでも打ち壊す力を秘めているのだ、面白くないはずがない。

中学生にして泣かせた女は数知れず、いつか女に刺される所か既に刺されかけた事数回、相手が思い詰めて「別れるなら死んでやる」と言われた事もあるが本当に死んだか確認はしていない。

浮気も泣かれるのが気にならないのも、やはり本気で好きにはならないから。自分が楽しむ為の恋愛で相手のことなど正直どーでもいい。ゲームのようなモノだから相手を喜ばせる行動もとるが。

物心ついた時からなんでもでき、求めなくてもなんでも手に入った弊害か、京介は人でも物でも、食べ物でさえ、好きになることがなかった。というか感情そのものがよくわからなかった。

むしろ男でも気にならないかも、と思ってからやっぱりあったかくて柔らかいから女の子の方がいいか、と京介にとってはそれぐらいだ。

「それは貴方が本当の恋愛をまだしていないからよ」

綾子さんに言われた。

「俺綾子さんとは本気で恋愛してるよ??」

憤慨したように言ってみせると、綾子さんはフフフ、と口紅が塗られた唇を色っぽく歪めて笑った。

「わざとらしいけど、恋愛ってわざとらしいほどが効くのよね」

いくつでも一緒か、と綾子さんがタバコをくわえたので、ライターを取って火をつけてあげた。

「綾子さんは本気で恋愛したことあるの??」

「貴方のお父さんに」

「冗談キツイって」

だったらその息子と付き合えないでしょと呆れたように言って俺もタバコを貰って火をつけた。

「付き合うなんて言っちゃうガキがタバコなんて吸わないの」

「じゃあなんて言えばいい??セフレ??」

それもなんか違うよね、と笑って煙を吐いた。
綾子さんのタバコはマイルドセブン･ブラック。普通のよりほんの少し軽めの味よりもその黒い箱が気に入って買っていると前に言っていた。よく分からないが人の趣味嗜好とははそんなものらしい。

「若いうちに本当の恋愛しないとマトモな大人になれないわよ」

貴方のお父さんみたいにね、と付け足す綾子さんに、

「うちの親父のことそんなふうに言うの綾子さんくらいだよ」

でも綾子さんも俺とニセモノの恋愛してる一人なんだから説得力ないなぁと言い返してやる。

「確かに道徳観念があるとは言えないわね」

でも、と。

「本当の恋愛をしたことがある立場だから言えるけど、貴方今のままじゃ何も変わらないわよ」

意味も解らないのに何故かその台詞に背筋が冷えた。

「別に俺変わりたいとも思ってないけど」

「でもそんなお面みたいな顔で笑うのが本当に楽しそうには見えないわね」

「･･･わかる??」

「人生経験の差ね」

綾子さんは親父の愛人の一人。･･･苦労が多いんだろう。

「でもさぁ、本当、本当って言うけど、そんなのどうしてわかる??」

俺なんてずっと偽物で生きてきたんだからむしろそっちが本物になってるんじゃん??と。

「自分が本当の恋愛してるかなんて解るもんなの??」

「解るわよ」

確信を持った笑顔で。

「本当の恋愛が出来る、運命の相手が現れたら、世界が色付いて見えるから」

「綾子さん意外とロマンチストなんだね」

正直、この時は全く信じていなかった。

この無彩色の世界に慣れすぎていて、色がついた光景なんて想像できない。恋愛しているときには少しだけ色が見えるが、すぐにそれも灰色に塗り潰されてしまう。

世界の全てに色がついたら、鮮やかすぎて目が潰れるんじゃないだろうか。

「会ってみればわかるわよ」

それがとても特別な事の割にはとても普通な事だってこともね。と言って慈愛に満ちた表情で笑った。

「ふーん、でもまぁ、」

とりあえず今は綾子さんがいるからいいや。そういってベッドに誘うと、タバコを消してベッドに乗って来てくれる。運命の相手？笑える。そんなのある訳ないだろう。当然のようにそう思ったのに、なんとなく人肌が恋しくて堪らなかった。

☆☆☆

高校は、学園の高等部ではなくて普通の高校に通うことになった。普通はエスカレーターなのだが、学園長の御令嬢に手を出したのがいけなかった。大人しそうな顔して振られたら妊娠したとか大騒ぎとはエグい。(その辺に抜かりはないハズだから無視していたが案の定デマだった)

その頃は、恋愛でさえ展開が読み切れるようになっていて焦っていた。唯一の楽しみがつまらなくなったら自分まで灰色に染まっていきそうだ。綾子さんももういないし、いつも以上に適当で自堕落な生活を送っていたらこの顛末だ。

「向こうの学園長はカンカンだが、まぁどうにかならないこともないな。どうする、京介」

ある日親父に呼び出されて言われた。

「俺はどっちでもいい。正直お嬢様にももう飽きたし」

「海外に留学する手もあるが」

「いいよ、どっかその辺の普通の高校で」

別に金持ち学園に未練はなかったし、親父もそんなのは気にしない。そんなわけで一応その地区で一番の進学校に適当に受験して入学した。

入学式の日。

入った高校は制服が可愛く、女の子のレベルも高かった。その中でも西中からの間垣リラという子が美人で有名らしい。外国の血が入っていて、そうとうレベルが高いとか。

仲良くなった西中からの男が紹介してくれるというからついて行ったが、正直そんなに期待はしていなかった。モデルと付き合ったこともあるのだ、素人にそこまで期待はできないだろう。

「あっ居た！あれが間垣リラだぜ。おい、リラー！」

そしてそいつに呼ばれ振り返ったリラは、笑っていて。

ブワッと鳥肌が立った。冗談じゃなく本気で吐き気がした。

知ってる、俺はこの顔を。元の素材となる顔は初めて見る顔だったが、表情の作り方は覚えがありすぎるくらいに見慣れている。

本当に、目の前に急に等身大の鏡を置かれた様だった。

俺はこんな顔で笑うのか。

言葉にならなかった。打ちのめされた。目の前のコも気付いたのか同じ様に突っ立っていて、それがまた鏡のようで気味が悪かった。

ドッペルゲンガーが現れたって、これ程驚きはしないだろう。

「あれ??お前ら知り合い??」

訝しむ今日出来たばかりの友人の声で、ハッと我に帰った。急いで笑顔を作る。同じタイミングで笑った顔に目眩がしそうになった。

「イヤバリバリ初対面！あんまり綺麗なんで驚いて･･･浅黄京介です、今日から３組、よろしく」

「･･･間垣リラです、私は４組･･･ゴメン弘毅、私ちょっと急ぐんだ」

「あ、そうなの??悪い、呼び止めて」

じゃあね、浅黄君も。と言って走っていく背中を呆然と見送った。

ちょっと残念だったけどスゲー綺麗なコだったろ?? と満足気に話す弘毅と適当に別れて、ズンズンと早歩きで帰ろうとした。

夢を見てる気がする。それもかなりのホラー。イヤでもクラス違うんだし別にもう会わなきゃ･･･美人ね、顔そのもの見る余裕なんて、

そんなことをグルグル考えながら歩いていたから、最初はそれに気づかなかった。校門まで来たときに気付いて思わず足を止めた。

桜は桜色。薄いピンクの花びらがヒラヒラと落ちていくその下の草は新緑の黄緑色。
学校の花壇にはチューリップが。赤、黄色、紫、白地にピンク。
校舎の白。道路を走り抜けたメタリックイエローのスポーツカー。アスファルトだってなんでだか光っている。
そしてそれら全ての上には、俺の名字と同じ、浅黄色の晴れ渡った青空。

色付いていた。それら全てが。ハレーションを起こしているかのように世界の全てが光り輝いている。

目を閉じて、開いてみても変わらない。

綾子さんの声が蘇った。

「解るわよ、世界に色がつくから」

正直、忘れていた。第一、これっぽっちも信じていなかった。これが、そうなのか。
でも、本当の恋愛が出来る相手??同じ作った顔で笑うあのコが??信じ難い気もするが、やはり。
もう１度、会わなければ。そう思って、踵を返してあの子が消えた方に向かった事で。

あの日々が、始まった。